

編集後記

久し振りにリハビリテーション看護の特集を組むことが出来た。リハビリテーション医療の中における看護の重要性は筆者が説明するまでもないことである。しかし、わが国にリハビリテーション医療が実際に導入されて以来、看護の報告や論文を今までに見ることが著しく少なかった。稀に出会うことの出来たリハビリテーション看護の文献も、非常に狭い範囲の経験を文にしたものか、外国の論文を直訳したとしか思えない日本という現場を無視した文章でしかなかった。このような状況から、今回の特集は脱却し得たのであろうか。

その結論は読者各位の判断に任せる以外ないのであるが、筆者はわが国にも次第にリハビリテーション看護がたしかな歩みをしていることが感じとれたように思われる。

特集の総論ともいべき論文である大橋氏の“総合病院におけるリハ看護”は、リハ看護を超えた急性患者と慢性患者に対する看護のあり方に言及して頂いた。さらに、氏はその方法論として行動科学的アプローチを示され、その実際も提示された。また、伊豆通信病院の諸伏氏の論文は、病院と地域をどのように看護がつながるかという問題に1つの解答を示された。さらに、リハビリテーション医療の中でも重要な対象であり、その中でも看護が重要な役割を果たすべき、頸髄損傷、

脳性麻痺、慢性関節リウマチ、呼吸器疾患の4つについて立派な論文を得ることが出来た。これ等の論文を読むと、このようなレベルのリハビリテーション看護が日本のどこでも行われている状況が一日も早く来ることを望むものである。と同時に、これ等の論文のようなレベルに引き上げるために努力を払って来られた指導者の方々の労苦に賛辞を捧げたいと思うのである。

しかし、一方では序論で三好氏が指摘しておられるようなリハビリテーション看護の原点をも脅かすような問題がまだ数多く残っている。チームとしてのリハビリテーション看護の正しい確立に努めて頂きたいと願うものである。

本号では、その他に窪田氏他の研究と報告は、氏の脳卒中患者の歩行能力にかけている執念を感じさせてくれた。また、症例報告では舌咽呼吸訓練という大変困難な問題を報告して頂いた。ここでも指摘されているが、わが国の福祉機器行政の柔軟性のなさは、関係者の努力を促したい。その他にも、数多くの文献とともに紹介して頂いたフランスの言語治療も興味深かった。

最後に機能修復の講座は、本号が最終回となった。著者各位に謝意を呈したい。

(大川 嗣雄)

次号予告(第13巻 第9号)

特集 障害者の生活関連用具

生活関連動作とその道具……………横市大 大川 嗣雄・他
環境制御装置について……………労災リハ工学センター 島 山 卓 朗
肢体障害者用コミュニケーション・エイドの

開発現況……………兵庫リハセンター 奥 英 久・他
移乗用機器……………東京都補装具研 市 川 洸
市販されている生活関連用具……………川崎医大 東嶋美佐子・他

研究と報告 車椅子処方における身体計測値と

疾患種類の影響……………神奈川リハセンター 大 橋 正 洋・他
重症心身障害児(者)のエネルギー消費量の
推定法の検討……………愛知県コロニー 下 村 勉・他

紹介 下肢関節障害に対する“proprioceptive”

訓練……………九州リハ大学校 中 山 彰 一・他

講座 リハビリテーション医に必要な全身管理

(9) 消化器……………神奈川リハセンター 大 橋 正 洋

高次神経機能の評価法 (1) 失語の評価法 ……東京都老人研 伊 藤 元 信

一頁講座 義肢のパーツ (9) 義手の継手 ……兵庫リハセンター 中 島 咲 哉

編集顧問

天 児 民 和
大 島 良 雄
河 邨 文 一 郎
五 味 重 春
砂 原 茂 一
津 山 直 一
土 屋 弘 吉

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
緒 方 甫
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
千 野 直 一
横 山 巖

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲 夫
岩 倉 博 光
江 口 壽 榮 夫
小 川 孟
荻 島 秀 男
奥 川 幸 子
加 倉 井 周 一
小 島 蓉 子
齊 藤 正 也
笹 沼 澄 子
澤 村 誠 志
高 橋 勇
高 松 鶴 吉
武 智 秀 夫
土 屋 和 夫
土 肥 豊
永 井 昌 夫
中 村 隆 一
野 島 元 雄
野 村 欽
長 谷 川 恒 雄
初 山 泰 弘
福 井 圀 彦
松 村 秩
三 島 博 信
矢 谷 令 子
米 本 恭 三
渡 辺 英 夫
(五十音順)

(細田、山田)